

1996アトランタオリンピック新聞報道から 日本選手の弱さと課題を探る

～「オリンピック」選手はどうあるべきか～

本間三和子, 大庭昌昭

Search for Future Tasks for the Japanese Olympic Athletes:
How Olympic Athlete Should Be Based on the Analysis
of Newspaper Articles on the Atlanta Olympic Games

Miwako HOMMA, Masaaki OHBA

Abstract

This study aims to examine the evaluation of the Japanese Olympic athletes and to examine the problems of the Japanese Olympic athletes based on an analysis of newspaper articles about the Atlanta Olympic Games. It will examine how Japanese programs could better train athletes in order to be more competitive with foreign athletes.

The newspaper articles suggest that the Japanese athletes could not perform to potential at the Olympic Games due to overestimation of their competency and insufficient information, unsatisfactory training environments, and psychological unpreparedness in difficult situations. The future tasks for Japanese athletes should include reforming the supporting system and the development programs, and maintaining satisfactory training environments.

Moreover, the Japanese Olympic athletes, although they may be amateurs, must have the same level of preparation and commitment as the professional athletes, for their sport, in order to better compete with foreign athletes.

1 緒 言

1996年7月19日～8月4日, アメリカ・ジョージア州アトランタ市で第26回オリンピック競技大会が開催された。日本オリンピック委員会(JOC)は総勢499名の日本選手団を派遣し, そのうち選手は310名(男子160名, 女子150名)であった。大会前に, JOC会長が掲

げた目標メダル数は金メダル5個を含む総数25～30個であったが, 結果は金3, 銀5, 銅6の計14個で目標には及ばず, 前回バルセロナ大会の22個より大幅に減少した。そのため, 個々には好成績をあげた種目があったが, 全体としては「不振」, 「惨敗」という印象が色濃く残った。大会後, 各競技団体およびJOCにおいて成績不振の原因究明が行われたこと

はいうまでもないが、スポーツ関連のシンポジウム、座談会、討論会でも、わが国の国際競技力低下に関わる問題がテーマとして取り上げられ活発に議論された。

ある競技団体のヘッドコーチの総評によれば、不振の一因に「トレーニングに専念するかたわら、若手選手の精神的安定指導を怠った」ことをあげ、マスコミの取材が激しくなる中で選手の精神バランスが崩れてきたが内面的な指導に費やす時間が薄れたことが不振の要因であると述べている¹⁾。また、世間においても、「新聞やテレビなどのマスコミが大会前におり立て、国民に過大な期待を持たせたことに罪あり、という意見が世間にある」²⁾ように、マスコミによってメディアヒーローが作られ、一部の選手への期待が過剰に高まったことはだれもが認めることであろう。オリンピック後に放映されたテレビのスポーツ討論会³⁾でも、「マスコミが期待しすぎるのではないか」、「メダルをあおりすぎるのではないか」、「負けた選手へのインタビューに思いやりのないのでは」などスポーツ関係者や見識者からマスコミの節度を越えた取材や過剰報道に批判が出された。もちろん、競技関係者からは「マスコミに押しつぶされるような選手では勝てない」と選手の世界面の弱さを指摘する発言も出されており、マスコミ対策を含めた今後の選手強化のあり方を考え直す必要性が問われている。

これまでにオリンピックを経験した選手やコーチから「オリンピックには魔物が棲んでいる」、「オリンピックでは何が起るかわからない」という類の言葉をよく耳にする。また、過去4回のオリンピックを経験し、すべての大会でメダルを獲得するという偉業を成し遂げたある競技のベテランコーチによると、今大会は10名の選手全員がオリンピック初出場者であったために「選手の理想とするレベルがコーチよりも低く、その理想のレベルを上げることに非常に苦労し、(中略)経験不足

の若い選手をオリンピックの大舞台で戦わすため、リーダーシップを取る辛さ、厳しさを思い知らされた大会」であったと語っている⁴⁾。このことから、オリンピックが他の国際競技会とは異質のものであることがわかり、選手やコーチはそれを十分に理解しておくことが大切であると考えられる。さらに、わが国のオリンピック放映時間は世界でいちばん長く、現地に赴く報道陣の数も他国よりはるかに多いことから、国民の関心度とメディアの注目度が非常に高いといえる。これまで騒がれたことのなかった選手がオリンピック代表に決まった途端に報道陣に取り囲まれるようになったり、普段はほとんど話題にされないマイナーな競技種目がオリンピックイヤーだけ取り上げられたりという現象が生じることもしばしばある。このような「オリンピック」の特異性を理解したうえで、オリンピックという大舞台で戦える選手の(強化、育成)に取り組むことが重要であると考えられる。

このような観点から、本研究では第一にアトランタオリンピックの新聞報道を分析し日本選手の評価を行うこと、第二に新聞記者の記事を検討することによって日本選手および日本の課題を探ることを目的とした。

2 方 法

全国紙の読売、朝日、毎日、産経、日本経済の各紙、および地方紙を対象とした。1996年(平成8年)7月初旬から8月末までの期間に掲載されたアトランタオリンピック関連の記事のうち、日本選手団の競技面に関する記事を選出した。それらの記事を、日本選手への期待、競技結果と試合内容の評価、戦いぶりの特色、弱さと課題に分類し、主に論評内容について検討した。なお、新聞記事は記者の個人的かつ一側面からの見解や論評であるためその客観性には制限があると思われる。しかしながら、記者らの視点は競技団体関係者とは立場を異にするため、しばしば新たな

側面を映し出すことがあるのではないかと考え、また、オリンピック期間中に肌で感じた生の意見であることを尊重し、検討材料とした。同様に、日本選手の不振の原因に関する論評は不振・惨敗と評価された種目や個人に対するものが中心で日本選手すべてにあてはまるとはいえないが、ここではできるだけ日本選手を一括して捉え、日本選手の最大公約数的なものを探ろうとした。

報道の大きさ、すなわち報道価値の高さを定量的に検討、分析するために、見出しの掲載頻度と大きさ、記事の紙面を占める割合について種目別、内容別に集計を試みた。しかしながら、競技による競技日程の長さの違い（数日にわたる種目と一日で終了する種目などの違い）や出場選手数、種目数の違いによって競技ごとにニュースソースの絶対量が異なるため、掲載頻度からの比較検討は難しいと考えられた。また、同一の記事に複数の競技種目が含まれていたり、一つの競技種目に関する記事であっても内容が多岐にわたっていたりすることから、記事の大きさによる量的な分析にも限界があった。とりわけ競技別の戦績評価（健闘・善戦あるいは不振・惨敗、期待度と活躍度）の判断は、最終成績に至るまでの記事や見出しの内容を時系列的に検討することが重要であると考えられたため、記事と見出しの内容、大きさ、掲載頻度、および特集で扱われる頻度、写真の有無などを量・質の両面から総合的に判断することとした。

3 結果と考察

3.1 オリンピック開会前の日本選手への期待

オリンピック開会前の日本選手への期待がどのようなものであったかを社説、総説、主張欄の記事およびスポーツ・特集面の記事から検討した。

3.1.1 社説、総説、主張欄における日本選手への期待

開会前の各紙の社説、総説、主張欄をみる

と、近代オリンピック百年を主題としたものがほとんどであった。日本選手の活躍の期待については、「活躍を期待はするが、自分のために精いっぱい力を尽くして五輪を楽しんできてほしい」という主旨のものが多くみられた。具体的には、「応援する側としては選手に、ただ悔いの残らぬよう、ベストを尽くせというだけでよかろう。」⁵⁾、「国のため、故郷のためと気張る必要はない。思う存分、競技を楽しんで帰ってほしい。」⁶⁾、「だが、何が何でもメダルを、入賞をなどとは言えない。ひのき舞台を楽しみながら世界の強豪と渡り合い、スポーツが持つ楽しさと感動、限界にチャレンジすることの大切さを伝えてくれれば、それで十分だ。私たちも肩ひじ張ることなく、五輪をありのままに楽しみたい。」⁷⁾、「日本選手の頑張り期待したいが、国を背負うほどの悲壮な頑張り、かえってマイナスだろう。スポーツを楽しみ、いい思い出をつくる気持ちで臨んでほしい。オリンピックは楽しむものだ。」⁸⁾などの表現がみられた。

記事からはメダル至上主義や過度な期待は感じられず、「楽しんできてほしい」という言葉が多くみられたことが特徴的であった。今大会では選手からも「オリンピックを楽しみたい」という言葉が頻繁に聞かれ物議をかもししたが、マスコミ側からも「楽しんできてほしい」という願いがあったことがわかった。これらの記事は社説や総説であるため、選手に普段接しているスポーツ記者の意とは異なる面もあると思われるが、昨今メディアが社会現象に及ぼす影響力の強いことから、「オリンピックは楽しむものだ」という概念化にマスコミの意がまったく反映していなかったとは言いきれないように思われる。

3.1.2 スポーツ・特集面における日本選手への期待

JOC 会長が掲げた目標メダル数（金メダル5個を含む総数25～30個）を大きく取り上げ、過去のわが国のメダル数や競技種目別メダル

獲得数を引き合いに出し、前回以上の活躍を期待した。朝日および毎日新聞が開会直前に掲載した競技の見どころや競技ガイドをみると^{9),10)}、新聞社各自が予想するメダル獲得数を具体化することはなかったが、これまでの国際的な実績、あるいは最近の躍進的な伸びや記録を根拠として、メダルの期待が高い選手名や種目名をあげていた。

特に期待の高かった競技種目は女子競泳、女子マラソン、柔道で、女子競泳と柔道においては複数のメダルが有力視されていた。また、お家芸といわれる柔道、男子体操、レスリングについては過去のオリンピックでメダルを量産してきた実績から、今回もメダルが期待された。個人で金メダルの期待が高かった選手は、青山綾里・鹿島瞳（女子競泳）、有森裕子・浅利純子（女子マラソン）、田村亮子（女子柔道）、古賀稔彦・吉田秀彦（男子柔道）、和田貴広・嘉戸洋（レスリング）であった。そのほか、千葉すず（女子競泳）、伊達公子（女子テニス）、小山ちれ（女子卓球）なども注目選手としてあげられ、前評判の高い選手に女子が多いことが特徴であった。

また、読売新聞では各競技の強化担当者または監督に対してメダル獲得目標数を調査しており、それによると主要競技の金メダル獲得目標数を合算すると15個、銀と銅を合わせた目標総数は42個であった¹¹⁾。これらの数字はあくまでも目標であるが、金メダル数はバルセロナの獲得数の5倍、金、銀、銅の総数はロサンゼルス¹²⁾の獲得数32個を大きく上回っており、非常に大きな目標が掲げられていると評された。

3.2 一面記事で報じられた内容

競技に関する記事のうちどのようなことを第一に報道しようとしていたのか、またもっとも大きく報じられた記事が何であったかをみるために、新聞の一面に掲載された見出しと写真について検討した。

3.2.1 一面に掲載された見出しと写真からみた報道価値の高い記事

一般的に、一面に掲載された見出しや写真に関連する内容は注目度、関心度が高く、報道価値の高いものであると考えられることから、読売、朝日、毎日の各紙におけるオリンピック期間中の朝刊、夕刊の一面に掲載された見出しと写真の掲載頻度を集計し、その内容を検討した。

3紙の朝刊、夕刊の一面に掲載された見出しと写真の内容は、アトランタと日本との時差および記事の締めきり時間などとの関係上、朝刊にはその日に行われる種目に関するもの、および一日で予選から決勝が順次行われる柔道や競泳などにおける途中結果に関するものが主な内容であった。また、夕刊ではアトランタ時間で前日行われた競技結果に関するものが主な内容であった。そして、それらの内容はおよそ次の4種類に分類することができた。まず第一にメダルの獲得を報じたもので、メダルを獲得した場合は必ず種目名あるいは個人名があげられその活躍が称えられた。第二に期待される種目や選手についての記事であった。例えば、「青山、鹿島そろって決勝へ」¹²⁾（女子競泳）、「伊達1セット先取 女子テニス準々決勝」¹³⁾のようにメダルの期待の高い種目や人気のある選手の途中結果や、「今夜注目の女子マラソン」¹⁴⁾のようにその日に行われる期待の種目が報じられた。第三に予想を上回る活躍や久々の好記録についての記事で、「日本人初」、「入賞〇年ぶり」、「～以来の」などの表現で試合結果や記録が報じられた。第四にそれまで順調な結果を収め期待がもたれていたのに負けを喫した場合や意外な不振を報じたもので、「男子サッカー苦杯 ナイジェリアに0-2」¹⁵⁾、「男子体操日本、最悪の10位」¹⁶⁾などがみられた。ただし、3紙ともに結果が不振であったものを一面で取り上げることは少なかった。

これらの4種類別に競技ごとの掲載回数を

みると表1のように示される。一面に掲載された見出しと写真の3紙を合わせた総数は136であった。競技別の掲載回数は柔道がもっとも多く39回、競泳が17回、陸上（マラソンを除く）が15回と続いた。これらの3つの競技は種目数、出場選手数が多く、競技日程が数日にわたって長い競技であることからニュースソースの絶対量が多いため、おのずと他の競技より掲載頻度が高くみられたと考えられる。しかしその要因だけではなく、柔道は事前の期待が高く、数多くのメダルを獲得したことから、「田辺まず準決勝へ」¹⁷⁾などの途中経過や「恵本が『金』女子柔道今大会「1号」」¹⁸⁾

というメダル獲得の見出しが柔道の競技期間中、連日一面を飾った。競泳は期待が高い種目であったことから、「××決勝進出」のように途中経過を報じられたが、最終結果が振るわなかったため同期間に行われた柔道に報道が集中した。陸上は「志水日本新で4位 女子5000メートルトラック入賞32年ぶり」^{19),20),21)}、「男子200メートル伊東 日本人初の準決勝進出」²²⁾のように久々の好記録が続出し、その活躍を報じた見出しが多く見られた。

これらより、一面の見出しと写真から新聞が何を第一に伝えようとしていたか、つまり報道価値が高まる要素を考えると、(1)メダ

表1 読売・朝日・毎日新聞の一面記事で報じられた見出しと写真の内容別、競技種目別掲載回数

種目	読売新聞					朝日新聞					毎日新聞					3紙合計				
	合計	メダル	期待	活躍	不振	合計	メダル	期待	活躍	不振	合計	メダル	期待	活躍	不振	合計	メダル	期待	活躍	不振
柔道	15	8	4	0	3	10	7	1		2	14	8	5		1	39	22	10	1	6
競泳	8		4	1	3	4		3	1		5		3		2	17		10	2	5
陸上	7		1	5	1	3		2	1		5		2	1	2	15		5	7	3
サッカー	3			1	2	2			1	1	4		1	1	2	9		1	3	5
野球	4	2	2			2	1	1			3	1	2			9	4			
女子マラソン	4	2	1		1	2	1	1			2	1			1	8	4	2		2
シンクロ	2	1	1			2	1	1			2	1	1			6	3		3	
ヨット	2	1	1			2	2				2	1	1			6	4		2	
自転車	1	1				2	2				2	2				5	5			
男子マラソン	1		1		1	1				1	2		1		1	5		2		3
レスリング	1	1				2	1	1			1	1				4	3	1		
飛び込み	1			1		1			1		2			2		4			4	
ソフトボール	2		1	1							2		1	1		4		2	2	
テニス						1		1			1				1	2		1		1
男子体操						1				1						1				1
バスケット	1		1													1		1		
新体操	1		1													1		1		
合計	53	16	18	9	11	35	15	11	4	5	47	15	17	5	10	136	46	46	18	26

【記事の分類基準】

メダル：メダルを獲得した選手の記事

期待：決勝進出や好発進などを報じメダルを期待する記事

活躍：予想以上・史上初・何年ぶりなどの好記録や活躍を報じた記事

不振：予選敗退、入賞ならずなど期待より悪い結果を報じた記事

ルの獲得、(2)期待・人気の高い種目や選手の競技経過、(3)予想を上回る活躍や久々の好記録、の3つの内容であったといえる。

3.2.2 三大報道

オリンピックの競技報道の中でもっとも大々的に報じられた三大報道は、女子マラソン銅メダルの有森裕子選手、柔道の金メダリスト3選手(恵本、野村、中村)、そして男子サッカー対ブラジル戦での勝利であった。これらの3つの記事は3紙のいずれにおいても、一面記事の中の1/2～1/3を占め、大きな見出しと写真でトップニュースとして報じられた^{18),23)～37)}。それぞれの報道価値について考えると、女子マラソンの有森選手はバルセロナ後の苦境を乗り越えて2大会連続メダル獲得という快挙を成し遂げ、レース後のさわやかな表情や印象的なコメントによって「銅メダルが金メダルに変わるような魅力を見せ」³⁸⁾、彼女の苦難を乗り越えた努力による成果と個人的魅力が高い報道価値につながったと考えられる。次に、柔道金メダリストの3選手は金メダルの成績が報道価値として認められたといえる。オリンピックがスポーツの最高のレベルの大会で、世界一を決めるものであることから、その栄誉を勝ち取った金メダリストやメダリストの報道価値が非常に高いことはいうまでもないと思われる。そして、男子サッカーは予選リーグで強豪ブラジルを破るという予想以上の大活躍によって大きく報道された。これについては、昨今のJリーグ人気や競技人口の急増によって国民の反響が大きかったことも報道価値を高めた一因であったと考えられる。

3.3 日本選手の競技結果や試合内容の評価

オリンピック期間中および大会終了後に報じられた日本選手の競技結果や試合内容に関する評価がどのようなものであったかを検討した。

3.3.1 日本全体の評価

日本全体には、メダル数が前回バルセロナ大会での22個から14個に大幅に減少したこと、多くの競技種目で世界との実力差が明らかとなったこと、自分の持てる力を存分に発揮することができなかったことなどにより、「惨敗」と評価された。

今大会ではメダル獲得国が79カ国に分散したことからもわかるように、世界各国のレベルが上がり、「あらゆる競技で世界の壁は厚みを増している」³⁹⁾。レスリングでは「世界のレベルアップが一段と進んだ」⁴⁰⁾と、これまで選手層が厚くて出場できなかった旧ソ連の選手たちが分散して出場してきたため世界のレベルが一気に上がり、全エントリー選手にメダルの可能性ありとまでいわれた。そして、「一方で自己ベストを出してもメダルに届かない選手もあり、世界の壁の厚さを切実に感じた五輪でもあった」⁴¹⁾。また、男子体操、女子体操、新体操、男子マラソンなどにおいては、選手や関係者自身によって世界との差が大きいことを認める発言が報じられ、記事の見出しにも「世界との差歴然」⁴²⁾、「日本勢、世界は遠く」⁴³⁾、「入賞なし『今の実力かな』」⁴⁴⁾というものが多くみられた。このように世界各国の競技力が上がり、日本と世界のトップランクとの格差が内外で指摘された。

社説や特集記事を見ると、「日本選手も柔道が面目を保ったし、女子マラソンの有森選手、ヨットの重・木下組のメダルは、コーチやバックアップの支えもあったが、自分自身の努力と精神力で挑戦しつづけたことを高く評価したい。(中略)とはいえ史上最多の選手団は日本の総体的な実力から不相応だったのではないか。国内での代表選考の甘さ、選手たちへの過保護、本番への調整ミスなど反省点も多いはず。」⁴⁵⁾というようにいくつかの種目や選手の活躍を評価しながらも、次の長野、シドニーへ向けて反省点や課題が多く、選手強化の再建が急務であると論じたものが多くみられた。そして、「・・・泣き崩れてコメントの

出せない日本選手が目立った。その涙は完全燃焼した表われではなく、実力を燃やしきれなかった切なさかもしれない。』⁴⁶⁾と結果的にメダルうんぬんではなく、選手が自分の持っている力を最高のレベルで発揮できなかったことの指摘や、「アトランタ五輪に五百人近い選手、代表を送り込んだ日本は予想以上の不振に打ちのめされた。メダル至上主義の批判を背景に、勝負にはこだわらずに、伸び伸びとプレーすべきだとの議論が登場している。しかし、『五輪を楽しんできました』とのコメントが果たしてそのまま通じるだろうか。』⁴⁷⁾と大会前の社説等にみられた「オリンピックを楽しんできてほしい」という願いとは矛盾した内容もみられた。その一方で、「だが、成績や力不足などを厳しく指摘するのは、もうやめようではないか。国威発揚のメダル競争から脱したい。優劣にかかわらず、もっと感動の方を大切にしたいものだ。『参加することに意義がある』の原点を思い起こそう。』⁴⁸⁾と、「オリンピックを楽しんできてほしい」に準じた内容も数少ないがみられた。

このように同一記者の論評ではないと思われるが、開会前と競技終了後で内容に矛盾がみられたことから、新聞記事は担当記者のその場そのときの個人的見解で書かれることが多いように考えられる。この点から、読者自身が書かれた論評をどのように理解するかという判断能力が重要であると思われた。

3.3.2 競技種目別にみた「健闘・善戦」と「不振・惨敗」の評価

各競技種目の戦いぶりを報じた記事や見出しの内容における時系列的な変化を検討した結果、「健闘・善戦」と評価された種目と「不振・惨敗」と評価された種目に分けることができた。図1に図式化したように、「健闘・善戦」とプラス評価を得たのは、女子マラソン、ヨット、野球、シンクロナイズドスイミング、自転車のメダルを獲得した種目をはじめ、予想以上の活躍をした男子サッカー、女子バス

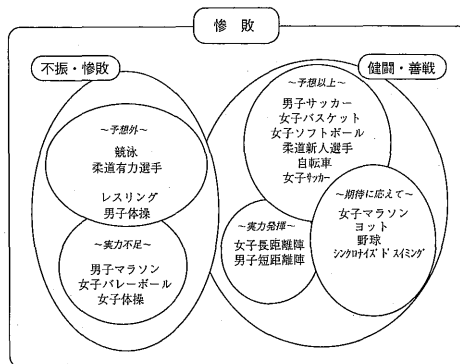


図1 アトランタオリンピック新聞報道からみた競技別の戦績評価

ケットボール、女子ソフトボール、柔道の新人選手や、実力を十分に発揮した女子長距離陣、男子短距離陣であった。「不振・惨敗」とマイナス評価されたのは、予想外だった男女競泳、柔道の有力選手のほか、男子体操、レスリング、男子マラソン、女子バレーボール、女子体操などであった。柔道については選手によって評価が分かれ、競技全体では不振と評価された。これら以外の競技種目は日本選手がそれほど大きく扱われておらず、結果と簡単なコメントのみであったため図には加えなかった。

3.3.3 競技種目別にみた期待度と活躍度からの評価

事前の期待度と実際の活躍度の関係を競技別にみると、表2のように分類することができた。[期待度>活躍度]はいいかえれば「不振・惨敗」であり、逆に[期待度<活躍度]は「健闘・善戦」を示している。[期待度>活躍度]の競泳、柔道有力選手、男子体操は「思わぬ不振」、「重圧で惨敗」、「どうしたニッポン」、「史上最悪」などの表現でその不振を報じられ、[期待度<活躍度]の男子サッカー、女子バスケットボール、女子ソフトボール、柔道新人選手は「大金星」、「快挙」、「大善戦」と予想以上の活躍を高く評価された。

そして、事前の期待度と実際の活躍度の差

表2 アトランタオリンピック新聞報道からみた競技別の期待度と活躍度の関係

期待度と活躍度の関係	競技種目
期待度＝活躍度 または期待度≤活躍度	女子マラソン、ヨット、野球、シンクロナイズドスイミング 女子長距離陣、男子短距離陣
期待度<活躍度	男子サッカー、女子バスケット、女子ソフトボール、柔道新人選手
期待度>活躍度	競泳、柔道有力選手、男子体操、レスリング

が大きいほど記事が大きく扱われる傾向がみられた。報道の大きさからみて、期待度>活躍度の差がもっとも大きかった種目は競泳で、期待度<活躍度の差がもっとも大きかった種目は男子サッカーであった。しかし女子マラソンだけは例外で、期待度＝活躍度または期待度≤活躍度であったにもかかわらず、銅メダル獲得の有森選手については他のどの競技よりも大きく報道された。

期待度と活躍度のズレがもっとも大きかった男子サッカー対ブラジル戦の勝利と競泳の惨敗について、その報道例をみてみた。

3.3.3.1 男子サッカー対ブラジル戦の勝利

ブラジルが金メダル候補として前評判の高いチームであったことから、男子サッカーの対ブラジル戦の勝利は世界的にも衝撃的なニュースであった。日本国内においては読売、朝日、毎日の各紙一面にそれぞれ「日本強豪ブラジル破る」^[35]、「最強ブラジルに勝った」^[36]、「日本、ブラジルを破る」^[37]という大見出しと写真が掲載され、スポーツ面では「大金星」^[49]、^[50]、「奇跡」^[51]、「よもやの金星」^[52]という表現で意外な勝利が大きく報じられた。

この初戦の対ブラジル戦を前にどのように報道されていたかをみると、「D組4チームの中で決勝トーナメントに進める上位2チームに残るために、守って引き分けるか、少ない得点差の負けにとどめ、残る2試合に期待をつなぐしかない。(中略)日本はある程度敗戦を覚悟しての戦いになるが、その場合も予選リーグを通過するために、最少失点にと

どめる必要がある。」^[53]とまったく勝つことを予期していない表現であった。しかしながら、「十回戦って一度勝てるか、という相手に、ここ一番の大舞台で勝ったのだから——。」^[50]というほどの奇跡的な勝利をもたらし、「光った監督のさい配」^[50]、^[54]と「ブラジル側の焦りを呼んだ組織的な守備」^[55]が勝因であったと分析された。次のナイジェリア戦は負けたが、後にハンガリー戦で勝利をあげたことから、サッカーは決勝トーナメントに進めなかったにもかかわらず、オリンピックではいちばん健闘した種目の一つとして評価を得た。

3.3.3.2 競泳の惨敗

「史上最強の女子競泳チーム」といわれたように、特に女子に対する期待は柔道に並んでもっとも大きかった。これは4月に行われた国内選考会で今季世界ランキングの上位記録を複数出したことにより、メダルが確実に狙えると予想されたためである。ちなみに、100m バタフライで青山、200m バタフライで鹿島の両者が今季世界ランク1位、200m 背泳ぎで中尾が今季世界ランク2位、200m 自由形で千葉が今季世界ランク3位の記録をマークした。しかし競技3日目を迎え、決勝にまだひとりも残らないという状態が続き、「どうした水泳ニッポン」^[56]、「不振止まらぬ競泳ニッポン」^[57]、「思わぬ不振が続く日本競泳陣」^[58]という見出しで競泳陣の意外な不振が驚きとともに伝えられた。そして、「各国のライバルやメダルの目標はひとまず忘れて、まずこのアトランタの舞台で自己ベストをめざしてもらい

たい。』⁵⁹⁾と当初のメダルの期待が3日目にして自己ベスト更新の期待へと縮小した。最終的にメダルゼロ、日本新4個と予想をはるかに下回る成績で、「メダルが取れなかったことより、自己ベスト更新が7つにとどまったことに今後の課題を見出すべきだろう。』⁴⁶⁾と厳しく批判された。競泳チームの敗因については調整ミス、精神的なひ弱さ、過信からの自滅、大舞台での経験不足、エースの不振などが各紙で指摘され、競技終了後の社説や総評でもさまざまな批判が集中した。

3.3.4 お家芸種目の評価

柔道、男子体操、レスリング、女子バレーボールはこれまでのオリンピックや世界選手権でメダルを量産してきた実績から、「お家芸」といわれて期待され、報道にはこの表現が頻繁に用いられた。男子柔道、男子体操では前半の不振が続く中、「無念の『お家芸』⁶⁰⁾と見出しがつけられ、柔道は全体では不振、男子体操は惨敗と評された。男子体操は「メダル死守」を課されていたが、団体で「日本史上最悪の10位」⁶¹⁾に屈し、「九大会連続でメダルを獲得し続けてきた体操ニッポンの“神話”が崩れた男子団体」⁶⁰⁾、「ミス続出 ゼロからの立て直し」⁶¹⁾、「『体操ニッポン』転落」⁶²⁾と厳しい見出しが目立った。また、レスリングにおいても「斜陽の王国2大会“金”ゼロ」⁶³⁾、「メダル『1』不振レスリング」⁶⁴⁾と金メダルが取れなかったことを批判され、銅メダル1個を獲得したにもかかわらず、惨敗と評価された。女子バレーボールは9位という成績に終わり、「史上最悪」⁶⁵⁾と見出しがついた。このように、お家芸といわれる種目はメダルの期待が高く、期待に応じた成績が収められなかった場合は痛烈に批判され、他の種目と比して記事の扱いが大きい傾向がみられた。

3.4 日本選手の戦いぶりの特色

日本選手の試合内容や競技結果を報じる記事の内容から、日本選手の戦いぶりの特色を

次の4つにまとめることができた。

3.4.1 期待の高かった選手が不振で、それほど注目されていなかった選手が活躍したこと

競技種目をみると、前評判が高く期待が寄せられていた競泳、男子体操などが不振で、それほど注目されていなかった男子サッカー、女子ソフトボール、女子バスケットボールなどが活躍した。個人では、柔道で「メダル獲得に貢献したのは、あまり期待されていなかったいわゆる『伏兵』だった。』⁶⁶⁾と金メダルが有力視されていた選手が負け、無名に近かった選手が金メダルを獲得した。また、競泳でもメダルが有力視されていた選手やエースが不振で、伏兵の選手らが日本新記録を樹立し健闘した。男子個人体操においてもエースより若手選手が上位につけた。このような現象は、期待の薄かった選手は精神的な重圧がないために伸び伸びと戦うことができ、前評判の高かった選手は緊張や精神的重圧のために力を最大限に発揮することができなかったからではないかと評された。

3.4.2 女子の活躍が目立ったこと

今大会では女子種目の増加が話題となり、日本選手団の女子の占める割合も男子とほぼ同数（選手310名中女子150名）に急増したことで事前から女子選手への期待が高かった。結果的には、柔道、マラソン、ヨット、シンクロナイズドスイミングでメダルを獲得し、長距離陣、バスケットボール、ソフトボールなどが入賞し、その活躍が高く評価された。日本選手のメダリストおよび入賞者の男女比率（図2）をみても、女子のメダル獲得数が全14個のうちの半数の7個、また入賞者も半数以上を占めていることから、女子選手が非常に活躍したことがわかる。さらに読売、朝日、毎日の3紙の一面で報じられた見出しをみても、その大部分が女子選手あるいは女子種目であったことから女子への注目、期待が高く、実際に活躍したことがわかる。

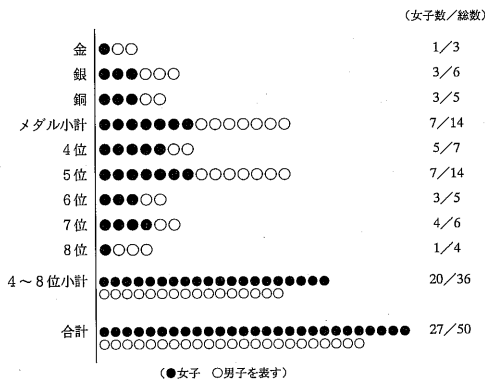


図2 アトランタオリンピック日本選手メダリスト・入賞者の男女比率

3.4.3 お家芸種目が不振であったこと

柔道は競技全体としては不振と評価され、男子体操、レスリング、女子バレーボールは過去最低の成績で惨敗と評価された。また、日本のメダル数が目標を大きく下回った一因として、「お家芸の不振響く」⁶⁷⁾とお家芸種目の不振が日本全体の不振に影響を及ぼしたと指摘された。

3.4.4 攻めの姿勢を持ち続けた者が勝ち、守りに回ったものが負けたこと

「この集中力と攻めの姿勢が、金メダルの推進力となった」⁶⁸⁾、「攻め抜いて栄冠手中に」⁶⁹⁾、「カウンターを恐れず、前に出た恵本は最近の日本選手が忘れかけていた柔道で強豪を倒した」⁷⁰⁾と柔道金メダリストに共通したのは、攻めの柔道であったと報じられた。また、サッカーの対ブラジル戦においては、「守りといっても消極的ではなく、積極的に前で勝負し、『これしかない』といった日本の勝ち方」⁷¹⁾が勝因であったと評された。一方、レスリングの優勝候補と期待された選手の敗因については、「3分間を逃げ切ろうとして、守りに入ってしまったからだ」⁷²⁾と指摘され、女子団体体操においても「失敗恐れ、攻め切れず」⁷³⁾、守りの演技に入ってしまったことが敗因にあげられた。「前評判の高かった選手は『攻め』の気持ちを忘れたのでは」⁶⁶⁾という指摘からも、勝つた

めには気持ちの上での攻めの姿勢が指導陣、選手ともに重要であると示唆された。

3.5 日本選手の弱さと課題

多くの種目で世界各国の競技力のレベルが上がり、日本と世界との格差が大きいことが明らかになった。競技終了後あるいはオリンピック閉会後の特集記事や記者座談会の記事において、精神面の弱さ、国際性の欠如、自立性の欠如、不十分な情報収集、トレーニング環境の不備などが日本選手の不振の原因であると指摘された。それらはおおむね(1)実力の過信と情報収集の不十分さ、(2)トレーニング環境の不備、(3)選手の世界精神面の弱さの3点にまとめることができた。

3.5.1 実力の過信と情報収集の不十分さ

大会前の記事を見ると、日本選手の国際競技力は低下傾向にあるといわれていたものの、まだ世界に通用する種目は多いと考えられていた。実際に、競泳は4月の時点で今シーズン世界ランキング上位の記録を出し、男子体操は前年の世界選手権でメダルを獲得した。そして、大会前に読売新聞が調査したメダル獲得目標数をみても大きな数字が示されたこと、また競技終了後にいくつかの競技団体関係者から「過信があった」⁷⁴⁾、「慢心があった」^{75),76)}ことを認める発言がみられたことから、少なからず実力を過大評価していたことがうかがえる。そして閉会後の記事では「一、二回の好記録を出す『金候補』と大騒ぎするマスコミも問題だが、やはり井の中のかわずであったことも反省しなければならない」⁴¹⁾と自分たちの力の過信と世界の最新の動向を把握していなかったことが批判された。また、「世界の水準や状況をどこまで把握していたのか。役員、選手の言動に現状認識の甘さを感じられた。選手たちが力を発揮できるよう、役員やコーチ陣による支援体制が整っていたかも問われよう。」⁷⁷⁾とJOCや各競技団体の組織、体制を問い直すものもみられた。

これらから、指導陣、役員をはじめとする組織が記録や実績を現在の競技力と勘違いし、現時点での選手の競技力をトータルな視点から見極めていなかったことが大きな要因であったと考えられる。すなわち、多くの要素からなる競技力を多角的に分析し、現在の選手に何が足りないのか、勝つためには何が必要なのかということの研究が十分になされていれば、それを補うための何らかの有効な戦法を練ることが可能であったと思われる。そのためには指導陣が常にアンテナを張りめぐらせ、世界最新の動向を見据えることが重要であると考えられる。日本は世界に目を向けて時代に即した選手強化を図る必要があり、これまでの競技力向上方策の根本的な見直しに迫られているといえる。まずは、徹底した情報収集や選手の競技力を科学的に把握するための専門スタッフを、現場で強化を行うコーチのほかに配置し、それらが効率的に機能するような組織体制を整えることが今後の課題の一つであろう。これに関連したことは、すでにJOC選手強化本部調査研究事業のプロジェクト21⁷⁸⁾で提言されており、『選手強化』から『競技力向上』へというコンセプト・チェンジ」および「プロフェッショナル・スタッフの登用」の重要性がアトランタオリンピックで改めて浮き彫りにされたといえる。

3.5.2 トレーニング環境の不備

「選手が引退後も不安なく、現役に打ち込めるような環境を備えてやることこそ、真の立て直し策ではないだろうか。」⁷⁹⁾と施設面の充実はもとより選手の環境整備を図ることが重要であることが指摘された。わが国にはナショナルトレーニングセンターがないばかりか、国家の経済的援助が少なく、社会的・経済的保障が十分でないため、現役引退を余儀なくされることが多いともいわれている。このことは今大会での日本選手の平均年齢が外国に比べて低いことからわかり、今大会の特徴といわれた外国選手の高年齢化傾向と対照的

であった。毎日新聞の記事によると、米選手団の平均年齢は過去最高の26.88歳で12年前のロサンゼルス大会より5歳上回っており、米五輪委員会は資金援助プログラムによってベテラン選手が競技を続けることが可能になったことを大きな要因にあげているが、プロ化の影響も大きいだろうと述べている⁸⁰⁾。また、今大会では、諸外国に結婚、出産を経た女子選手が多くみられ、彼女らが良い記録を出し続けていることも話題となった。

日本が経済大国でありながら国家および民間の資金援助が十分でないことは、国民のスポーツへの関心が低く、その価値観が低いことの表われとも考えられる。また、女性が結婚、出産後も競技に専念するということはわが国に根強く残っている男女観を打ち破る必要がある。すなわち、日本においてトレーニング環境を整備するということは、スポーツの文化的側面や価値観、および日本人の社会通念を考え直さねばならない問題であり、その解決は容易ではない。スポーツの文化的意義を国民の中に位置づけていくとともに、選手が大学卒業後も安心してトレーニングに専念できる体制を整えるための関係者の努力が必要であると思われる。

3.5.3 精神面の弱さ

3.5.3.1 日本選手の極限での弱さの指摘

ここいちばんというところで力を出し切れない選手がみられ、日本選手の極限での精神面の弱さが指摘された。特に競泳においては、「“最強女子”本番でもろさ」⁸¹⁾、「若いチームにつきまとう大舞台での経験不足。そして極限での精神面の弱さ。」⁸²⁾、「日本では決して経験できない1万4千人の大観衆にのみ込まれた心理的な要因も大きい」⁸³⁾と精神面の弱さが大きな敗因で、「“甘やかし構造”解消が急務」⁸⁴⁾と選手の過保護扱いが問題視された。その一方で、期待の青山、鹿島両選手が女子100mバタフライでメダルを獲得できなかったことに関して、「(中略)しかしレース運びのまずさ

を責めるのは酷だろう。開幕して4日目。日本にはまだメダルはないどころか、決勝進出さえ厳しい状況が続いた。『競泳日本の命運はこの一戦にあり』といわんばかりの期待。いくら気にしないように、としてもそれは無理な注文。14歳には背負えないほどの重荷だったはずだ。』⁸⁵⁾と若い選手への期待が重すぎたことをあげ、選手擁護の声も聞かれた。また、レスリングや卓球では「若手に世界で修業を」⁶⁴⁾、「一度落ちたレベルを引き上げるのは容易でない。まずは若手に国際舞台を十分に経験させ、世界の力を実感させることだ」⁶⁴⁾と外国での武者修業の重要性が論じられ、日本選手がもっと世界でもまれて精神的に成長する必要があることを示唆した。批判の多い中で、唯一女子バスケットボールは海外遠征を重ね国際大会で経験を積んだ強化策が善戦につながったと報じられた⁸⁶⁾。

また、予想以上のメダルを量産した米国に関して、「記録が限界に近づくにつれ、精神の重圧をどう克服するかが勝敗を微妙に左右する。(中略)今回の五輪で圧勝した米国選手団は、専門の心理学者がチームを組み、精神面で選手を支えた。勝敗の結果ではなく、自分の限界を突破することに焦点を合わせるよう選手に指導した」⁴⁶⁾と心理面でのトレーニングに力を入れてきたことが成果をあげたと報じた。わが国においては、これまで精神力の強化といえば普段の技術・体力トレーニングの中でなされてゆくものと考えられがちであったが、今後は技術や体力のトレーニングを重視すると同様に体系にもとづいた心理面のトレーニングに目を向け、「心・技・体」の三者をバランスよく鍛える必要があると考えられる。

3.5.3.2 競技終了後のメディア対応の未熟さの指摘

また、多くの記事で指摘されたのが、日本選手やコーチの競技終了後の態度についてであった。「取材現場で彼我の差をつくづくと感

じさせられることがある。選手とメディアの距離もそうだ。米国の女王ジャネットエバンスは予選落ちでも要望とあらば会見上に姿を現し、堂々と思いを語ってみせた。」と外国トップ選手の自立ぶりを引き合いに出し、「開幕直前の会見に選手の姿はなく、コーチだけ。もしメダルが取れなかった場合に選手の会見を辞退できないか、という話まで出てきた。(中略)選手を大事にしたい気持ちは分かる。でも過保護になっては選手は育たない。」⁸⁷⁾と選手の過保護扱いによる自立性の欠如を指摘した。ほかにも、「負けた時、何も話せない日本人選手が多すぎる。(中略)負けると記者会見に出ないなんて、国際性欠如の最たるもの。」⁸⁸⁾、「勝敗にかかわらず、自分のプレーの善しあしを明確に分析する外国選手が多いなかで、泣き崩れてコメントの出せない日本選手が目立った。」⁴⁶⁾、「『負けたので話したくない』という姿勢では決して一流のスポーツマンにはなれない。」⁸⁹⁾と同様の批判がみられた。また、朝日新聞の記者座談会の記事には「男子サッカーがナイジェリアに破れたあと、記者会見を拒否したのは情けない。大会役員からも『彼らもプロなんだろう』といわれ、恥ずかしかった。」⁹⁰⁾という意見もみられた。

一方、日本選手の中で、メディア対応の高い評価を得たのは女子柔道の田村選手と男子陸上の山崎選手であった。「田村と山崎が敗因を淡々と語ったのは立派だった。(中略)海外のプロ選手と戦うには、こういう精神的なタフさが、不可欠になっている。」⁶⁷⁾と評し、田村選手については「4年の月日が流れ、人間的に格段の成長を遂げていた。(中略)見ていて実にさすががしかった。」⁸⁸⁾と前回バルセロナでの対応との違いを評価された。

このような日本選手のメディア対応から感じられた未熟さを、記者らは国際性・自立性の欠如という言葉で表現した。つまり、日本選手の行動と言動面を世界のトップアスリートやプロ選手の堂々たる態度と比較している

わけであるが、言語、文化、国民性の違いや日本選手の平均年齢が低いこともその要因といえよう。しかしながら、今後、オリンピックがさらにプロ容認化の方向に進むことによって、年齢の高い、場を多く踏んだたくましい選手の参入が増えてくることはまちがいない。このような状況下において、大舞台で最高の力を発揮できる選手、勝敗にかかわらず自分のプレーを明確に分析できる選手、負けてもきちんと語れる選手を育成していくことがたいへん重要であると考えられる。

4 結 論

4.1 新聞報道からみた日本選手の評価

新聞報道によると、期待された日本選手は振るわず、多くの競技種目で世界との実力差が明らかとなり、全体には「惨敗」と評価された。そして日本選手の不振の原因として、実力の過信と情報収集の不十分さ、トレーニング環境の不備、および選手の精神面の弱さの3点が主に強調され、今後の長野およびシドニーオリンピックに向けて組織体制の改革、環境の整備、選手育成方策等における選手強化の再建が急務であると考えられた。

4.2 「オリンピック」選手はどうあるべきか

4.2.1 マスコミとの付き合い方

大部分の国民はメディアを通してしか選手や大会の情報を得る手段がないことから、メディアの報道内容は非常に影響力が大きいものである。メディアの本来の姿は事実を正確に伝えることであるが、最近のスポーツ報道は演出過剰気味といわれている。特に民放テレビではその傾向が顕著で、山崎氏の言葉を借りると「スポーツ中継のワードショー化、バラエティ番組化には目に余るものがあるが、オリンピックも同様。」⁹¹⁾で、本来の競技を見たい、見る者それぞれの感じ方で競技を見たいと願う者からすればまことに不愉快なものとなっている。

では、今回取り上げた新聞について考えてみることにする。新聞報道はテレビのように感動の押し売りや芸能タレントの起用はないまでも過剰な期待と厳しい批判が相反し、期待も評価も過大であったと思われる。メディアにおいてもメダル至上主義や「お国のために」を排する方向にあるが、結果的にはメダルの数で惨敗と評価したことも事実である。産経新聞運動部長の沖野氏は「私自身、メダル至上主義を否定するが、目標を「勝つ」ことに設定しなければスポーツは存在基盤を失う」⁹²⁾と言い放ち、沖野氏の意見をもってすれば、負ければその敗因を追究されるのは当然のことであり、マスコミがその役割を担うことも批判されることではない。だからといって、選手を逆なでしたり、士気を失わせるようなマナー欠如の取材やインタビューは行うべきでないだろう。ましてや一選手を非難するなどの行為は許されるべきでないと思われる。

今大会では選手の「オリンピックを楽しみたい」という発言が目立った。そして、競泳女子のエースが力を出し切れなかったにもかかわらず、「楽しめた」ことを強調し続け、マスコミからのバッシングが起こった。スポーツライターの永井氏は、「××選手の『楽しむ』の向こうには、握り拳が見えたような気がする。多分、それは本人も承知のことだろう。しかし、何かアクションを起こさずにはいられない……。その手段が『楽しむ』の連発になったのではないか。」⁹³⁾とスポーツ総合誌で分析しており、筆者も同様に捉えた。しかしながら、結果的に彼女がマスコミに振り回され、競技に専念できなかったことは事実である。また一方で、年齢の若い選手らはまったくの無防備の状態でマスコミ攻勢を浴びた。選手がマスコミによって過重なストレスやプレッシャーを課されたことは、そのヘッドコーチの「(合宿強化中) マスコミによる取材が激しく、少しずつ選手がプレッシャーを感じ始め

たことも事実である。練習の実力は別として自分から逃げ、競争相手と比較されることをいやがる傾向が徐々に見受けられた。精神的バランス感覚が少し欠けてきていたことが心配された。¹⁾という報告からも読み取れる。

しかしながら、選手に過剰なストレスやプレッシャーを与えたことを一方的にマスコミがメダルをあおったからだとするのは疑問である。ここで明らかとされたように、競技団体側の過信やメダル獲得目標数の大きさをみてもマスコミ側にメダルをあおらせる風を強めた一因が競技団体側にあったと考えられるからである。

一方、マスコミによって注目されることが選手の励みになることも多く、その競技の普及にもつながるため、マスコミのプラス効果を競技力向上にうまく生かすことも重要である。また、オリンピック代表選手はプロ意識を必要とされる国際的な大舞台で戦うチャンスを与えられた選手である以上、必要に応じてマスコミ対応にあたることも義務と思われる。それゆえ、画一的にマスコミの過剰な取材を避ける方向にマスコミ対策を講ずるのではなく、指導者およびスタッフは選手への負担が過重にならないように選手の心理状態や健康状態を常に把握し、選手個々に応じたメディア対応を図る必要があると思われる。そして、マスコミ側は事前に選手や競技についての知識を持ち、マナーをわきまえたうえで選手との信頼関係を築くことが大切である。そうして三者の適切な関係を維持することで、選手、コーチは強化の一助としてマスコミを利用できるであろうし、マスコミは選手の本音に触れることもできると考えられる。

4.2.2 プロ意識の重要性

わが国においては「お国のために」頑張ることは誰も期待していないだろうし、「自分のために」頑張ることを明言する選手が多い。しかしながら、オリンピックという特殊な舞台では「自分のために」というアマチュア意

識のみでは通じない場合が多いと思われる。文芸春秋編集長の岡崎氏はこのことに関連して、女子マラソンメダリストの3選手が何のために走ったかということに触れ、ロバ選手はエチオピアという貧困と部族間の闘争を抱えた「祖国のため」、エゴロフ選手は国家体制が崩壊し20人の親類縁者の生活を支えなければならぬことによる「家族のため」、有森選手は「自分のため」と3者がそれぞれ異なることから次のように述べている。「有森がバルセロナ後の4年間に味わいつくした一種の目標喪失状態は、スポーツは個人です以外にないものでありながら、自分のためにするスポーツの困難さを見せたといえるだろう。オリンピック・スポーツのレベルになると、どこかで『祖国』や『家族』、つまり大であれ小であれ、何らかの共同体＝『公』とのかかわりを意識しなければ、スポーツ人生を貫けないことを示しているように思われる。『自分』だけのスポーツ、というようなものはアマチュアの特権であって、オリンピック・スポーツの狭き門をくぐるプロたちには許されないものかもしれないのである。」⁹⁴⁾と。

オリンピックは自分のためではあるが、岡崎氏がいうように現実には公と関わりの強いものであろう。オリンピックが国威発揚の場として利用されることは好ましくないが、途上国の選手に「祖国の国民を勇気づけたい」という思いが強いことは推察できる。その気持ちに極限で頑張ることのできる力となるのであれば、それを否定することはできないであろう。裕福な国家、国民であるわれわれの意識にナショナリズムを復活させる必要はないが、日本のオリンピック選手にプロ的な意識が欠けていることは認めざるを得ないと思われる。ここでいうプロ的な意識とは、競技に対する姿勢や意見を明確に持ち自分自身を冷静に分析できることである。これはマスコミ対応のためだけではなく、国際的な大舞台で世界と戦う「オリンピック」選手の基本条

件であるともいいかえられる。たとえ国民やマスコミが「オリンピックを楽しんでほしい」と願ったとしても、勝つことを最大の目的として命がけで取り組んでいる各国のオリンピック選手と互角に戦おうとするならば、「オリンピックは参加することに意義がある」という言葉に逃げてはならないと思われる。それが現実の「オリンピック」で戦うことを許される選手ではないだろうか。

引用記事および引用文献(新聞記事は見出し、日付、新聞名、年号の順に記した)

- 1) 野本敏明：アトランタ五輪競技報告〔競泳〕、月刊水泳、9：1—9、1996.
- 2) 中条一雄：オリンピック報道と実態のギャップ、体育科教育、11：20—22、1996.
- 3) なぜ弱い日本のスポーツ、テレビスポーツ討論会、NHK 衛星第一放送、1996年10月12日放送.
- 4) 井村雅代：アトランタ五輪・シンクロ報告、月刊水泳、10：1—4、1996.
- 5) 巨怪化五輪も原点は守れ(主張) 7月19日付産経新聞、1996.
- 6) 素直に喜べない五輪の巨大化(社説) 7月19日付北海道新聞、1996.
- 7) 光と影を映すアトランタ五輪(社説) 7月19日付新潟日報新聞、1996.
- 8) 百年を迎えるオリンピックに(社説) 7月19日付神戸新聞、1996.
- 9) 届くか100個目の『金』 7月19日付朝日新聞、1996.
- 10) 熱い夏 いよいよ秒読み 7月19日付毎日新聞、1996.
- 11) 目標大きく金「15」 7月6日付読売新聞夕刊、1996.
- 12) 青山、鹿島そろって決勝へ 7月24日付毎日新聞、1996.
- 13) 伊達1セット先取 女子テニス準々決勝 7月30日付朝日新聞、1996.
- 14) 今夜注目の女子マラソン 7月28日付朝

日新聞、1996.

- 15) 男子サッカー苦杯 ナイジェリアに0—2 7月24日付毎日新聞夕刊、1996.
- 16) 男子体操日本、最悪の10位 7月23日付朝日新聞夕刊、1996.
- 17) 田辺まず準決勝へ 7月22日付毎日新聞、1996.
- 18) 恵本が『金』女子柔道今大会「1号」 7月24日付朝日新聞夕刊、1996.
- 19) 志水日本新で4位 女子5000メートルトラック入賞32年ぶり 7月29日付読売新聞夕刊、1996.
- 20) 志水日本新で4位 女子5000メートル 7月29日付朝日新聞夕刊、1996.
- 21) 志水日本新で4位 女子5000メートル 7月29日付毎日新聞夕刊、1996.
- 22) 男子200メートル伊東 日本人初の準決勝進出 8月1日付読売新聞夕刊、1996.
- 23) 有森「銅」連続メダル 7月29日付読売新聞、1996.
- 24) 有森が『銅』連続メダル 7月29日付朝日新聞、1996.
- 25) 有森「銅」連続メダル 7月29日付毎日新聞、1996.
- 26) 柔道・恵本やった待望の「金」 7月24日付読売新聞夕刊、1996.
- 27) 中村兼 悲願の「金」 7月25日付読売新聞夕刊、1996.
- 28) 無念の「銀」田村 執念の「金」野村 7月27日付読売新聞夕刊、1996.
- 29) 世界レベルの大会初出場で“金星”野村 7月27日付読売新聞夕刊、1996.
- 30) 中村兼 逆転の『金』 男子柔道待望の1号 7月25日付朝日新聞夕刊、1996.
- 31) 野村殊勲の『金』 7月27日付朝日新聞夕刊、1996.
- 32) 恵本、待望の「金」1号 7月24日付毎日新聞夕刊、1996.
- 33) 柔道男子初の「金」中村兼 7月25日付毎日新聞夕刊、1996.

- 34) 野村有終の「金」 7月27日付毎日新聞
夕刊, 1996.
- 35) サッカー男子予選 日本強豪ブラジル破
る 7月22日付読売新聞夕刊, 1996.
- 36) 「最強ブラジルに勝った」 7月22日付
朝日新聞夕刊, 1996.
- 37) 日本, ブラジルを破る 7月22日付毎日
新聞夕刊, 1996.
- 38) アトランタ五輪が終って 映像化進む五
輪の行方(社説) 8月5日付日本経済新聞,
1996.
- 39) 聖火消えて 上 エース不振 8月6日
付北海道新聞, 1996.
- 40) メダル「1」不振レスリング 8月4日
付若手に世界で修業を 読売新聞, 1996.
- 41) 五輪と企業スポーツ なぜ強くなれぬ日
本 8月13日付沖縄タイムス, 1996.
- 42) 世界との差歴然 8月5日付読売新聞,
1996.
- 43) 日本勢, 世界は遠く 男子マラソン 8
月5日付読売新聞夕刊, 1996.
- 44) 入賞なし『今の実力かな』宗茂コーチ 8
月5日付日本経済新聞, 1996.
- 45) アトランタが残した光と影(主張) 8月
6日付産経新聞, 1996.
- 46) メダルの色, 涙の意味(社説) 8月8日
付朝日新聞, 1996.
- 47) アトランタ五輪を終えて 米国第一主義
の敗北 8月6日付東京新聞, 1996.
- 48) アトランタ五輪 爽やかさと課題を残し
て・・・(社説) 8月5日付熊本日日新聞,
1996.
- 49) ブラジルに大金星 7月22日付読売新聞,
1996.
- 50) 大金星, 光ったさい配 7月23日付日本
経済新聞, 1996.
- 51) 日本奇跡起こした 7月22日付読売新
聞, 1996.
- 52) まさかの黒星よもやの金星 8月6日付
読売新聞, 1996.
- 53) 川口の出来カギ 最少失点にしたい日本
男子サッカーあすブラジル戦 7月21日付
読売新聞, 1996.
- 54) 奇跡呼んだ監督の決断 守備的 MF に服
部を起用 見事に的中 7月23日付読売新
聞, 1996.
- 55) 焦り誘った組織的守備 7月23日付読売
新聞, 1996.
- 56) どうした水泳ニッポン 7月22日付毎日
新聞, 1996.
- 57) 不振止まらぬ競泳ニッポン 7月25日付
毎日新聞, 1996.
- 58) 水泳陣の奮起 地元は祈る・・・ 7月
24日付読売新聞, 1996.
- 59) 重圧で惨敗, 競泳陣 7月22日付読売新
聞夕刊日, 1996.
- 60) 無念の「お家芸」 7月23日付読売新聞
夕刊, 1996.
- 61) 日本史上最悪の10位 7月23日付読売新
聞, 1996.
- 62) 最悪の10位「体操ニッポン」転落 7月
23日付日本経済新聞夕刊, 1996.
- 63) 斜陽の王国2大会“金”ゼロ 8月2日
付読売新聞夕刊, 1996.
- 64) メダル「1」不振レスリング 若手に世
界で修業を 8月4日付読売新聞, 1996.
- 65) 女子バレー史上最悪 一貫した強化策必
要 7月28日付読売新聞, 1996.
- 66) 聖火消えて 上 エース不振 8月6日
付北海道新聞, 1996.
- 67) お家芸の不振響く 体操格差歴然／女子
競泳弱い精神面 8月5日付日本経済新聞
夕刊, 1996.
- 68) 攻め貫いて野村「世界一」 7月27日付
読売新聞夕刊, 1996.
- 69) 柔道金3 山下監督「日本柔道の神髄」
攻め抜いて栄冠手中に 7月27日付日本経
済新聞夕刊, 1996.
- 70) 強心臓 歴史作った恵本 猛者次々と攻
め倒し 7月25日付毎日新聞, 1996.

- 71) 積極的に前で守り 7月22日付毎日新聞夕刊, 1996.
- 72) 夢消した消極姿勢 8月2日付読売新聞夕刊, 1996.
- 73) 失敗恐れ、攻め切れず 7月22日付毎日新聞夕刊, 1996.
- 74) 「規定の弱さ」を過信 7月24日付読売新聞, 1996.
- 75) 「日本勢に慢心あった」日本水泳連盟が総括 8月22日付毎日新聞, 1996.
- 76) アトランタの17日 上 日本の課題 タイムが独り歩き 精神面にひ弱さも 8月5日付読売新聞, 1996.
- 77) 日本選手は「完全燃焼」できたか(社説) 8月6日付読売新聞, 1996.
- 78) わが国における中央競技団体の選手強化システムに関する研究報告書, 21世紀における日本の選手強化のトータルシステムのあり方についての調査研究事業—プロジェクト21—, 財団法人日本オリンピック委員会選手強化本部, pp88—91, 1996.
- 79) 求められる環境整備 8月22日付産経新聞夕刊, 1996.
- 80) 米選手団高年齢化 7月18日付毎日新聞, 1996.
- 81) 10代の選手多く萎縮 エース千葉不振響く “最強女子” 本番でもろさ 7月22日付日本経済新聞夕刊, 1996.
- 82) 女子400m メドレーリレー 不振日本、予選落ち 7月25日付読売新聞, 1996.
- 83) 競泳陣の不振 心理的要因!? 7月26日付読売新聞, 1996.
- 84) 惨敗日本競泳陣 “甘やかし構造” 解消が急務 7月25日付産経新聞夕刊, 1996.
- 85) 後半の失速 重すぎた期待 7月24日付読売新聞, 1996.
- 86) バスケット日本女子 米に善戦 8月1日付読売新聞夕刊, 1996.
- 87) 過保護では? 7月26日付読売新聞, 1996.

- 88) 記者座談会 負けるとダンマリ過保護な日本選手 感動シーン刻んだ有森、田村、杉浦・・・ 8月6日付読売新聞, 1996.
- 89) 会見での田村すがすがしく 7月27日付読売新聞夕刊, 1996.
- 90) アトランタを振り返る 記者座談会 8月6日付朝日新聞, 1996.
- 91) 山崎浩一: スポーツ中継に筋書はいらない。視聴者は生のアトランタが見たかった。、Number, 9:13, 1996.
- 92) 沖野均: 「リラックス」はき違い 低迷続く日本の五輪代表, 8月7日付産経新聞夕刊, 1996.
- 93) 永井洋一: 競技を楽しむとはどういうことなのか? 明暗を分けた有森と千葉を例に考える, Number, 9:11, 1996.
- 94) 岡崎満義: 現代スポーツの「聖と俗」—アトランタ五輪を見ながら考えたこと—, 体育科教育, 11:17—19, 1996.

参考記事および参考文献(新聞記事は日付順に記した)

- 1) 金5個が目標 7月15日付毎日新聞夕刊, 1996.
- 2) 五輪を楽しみたい, という願い(社説) 7月19日付東京新聞, 1996.
- 3) 百周年オリンピックの光と陰(社説) 7月20日付読売新聞, 1996.
- 4) 好調競泳陣さあ本番 7月20日付読売新聞夕刊, 1996.
- 5) 先陣は小川、阿武 柔道陣に気負いなし 7月20日付読売新聞夕刊, 1996.
- 6) アトランタサッカーの“大金星”に拍手(社説) 7月23日付熊本日日新聞, 1996.
- 7) 「キーマン」やはり前園 ナイジェリア戦きょうキックオフ 7月24日付読売新聞, 1996.
- 8) 伏兵恵本世界一つかむ 7月24日付読売新聞夕刊, 1996.
- 9) 強気で攻め抜き金星 7月24日付読売

- 新聞夕刊, 1996.
- 10) 米初の団体女王 日本振るわず最下位
7月24日付読売新聞夕刊, 1996.
 - 11) 競泳開幕 新勢力メダル続々 7月28
日付読売新聞, 1996.
 - 12) 規則改正との“戦い”体操 7月30日付
読売新聞, 1996.
 - 13) 走り続ける30代選手たち 7月30日付日
本経済新聞, 1996.
 - 14) プロ全盛の五輪 日本のアマ選手も苦戦
7月31日付日本経済新聞, 1996.
 - 15) 日本勢“武者修業”を 8月2日付読売
新聞, 1996.
 - 16) アトランタの17日 下 日本の課題 支
援システムの差 メダル数に直結? 8月
6日付読売新聞, 1996.
 - 17) 五輪と企業スポーツ なぜ強くなれぬ日
本 8月13日付沖縄タイムス, 1996.
- ※以下は新聞一面に掲載された記事
- 18) 日本競泳陣振るわず 7月21日付読売
新聞, 1996.
 - 19) 柔道阿武も完敗 7月21日付読売新聞,
1996.
 - 20) 千葉(女子200自) 決勝進出ならず 7
月22日付読売新聞, 1996.
 - 21) 柔道中村佳は4回戦敗退 7月22日付
読売新聞, 1996.
 - 22) 柔道田辺銀 待望の初メダル 7月22
日付読売新聞夕刊, 1996.
 - 23) 日本勢苦戦続く 7月22日付朝日新聞,
1996.
 - 24) 初メダルは田辺「銀」女子柔道 7月22
日付朝日新聞夕刊, 1996.
 - 25) 競泳女子 千葉ら決勝に進めず 7月
22日付毎日新聞, 1996.
 - 26) 伊東決勝ゴール男子サッカー 7月22日
付毎日新聞夕刊, 1996.
 - 27) 田辺が「銀」日本初メダル 女子柔道
7月22日付毎日新聞夕刊, 1996.
 - 28) 競泳女子3人決勝進出 中村・中尾
(100背), 山野井(400自) 7月23日付
読売新聞, 1996.
 - 29) 中村女子100背4位入賞 7月23日付読
売新聞夕刊, 1996.
 - 30) ソフトボール強豪・中国を完封 7月23
日付読売新聞夕刊, 1996.
 - 31) 吉田初戦一本負け 柔道86キロ級 7
月23日付朝日新聞, 1996.
 - 32) 競泳の3人決勝進出 山野井中村中尾
7月23日付朝日新聞, 1996.
 - 33) 吉田, 初戦一本負け 柔道男子86キロ
級 7月23日付毎日新聞, 1996.
 - 34) 中村中尾山野井 決勝に進出 女子競
泳 7月23日付毎日新聞, 1996.
 - 35) 女子100メートル背中村真衣4位入賞
7月23日付毎日新聞夕刊, 1996.
 - 36) 女子ソフト中国を完封 7月23日付毎
日新聞夕刊, 1996.
 - 37) 古賀, 恵本準決勝へ 7月24日付読売
新聞, 1996.
 - 38) 競泳100バタ青山, 鹿島決勝進出 7月
24日付読売新聞, 1996.
 - 39) 古賀は惜しくも「銀」 7月24日付読売
新聞夕刊, 1996.
 - 40) 100バタ鹿島4位, 青山6位 7月24日
付読売新聞夕刊, 1996.
 - 41) サッカーナイジェリアに敗れる 7月24
日付読売新聞夕刊, 1996.
 - 42) 青山, 鹿島決勝へ 女子百メートルバタ
フライ 7月24日付朝日新聞, 1996.
 - 43) 古賀は「銀」 7月24日付朝日新聞夕刊,
1996.
 - 44) 不振の柔道 古賀は準決勝進出 7月
24日付毎日新聞, 1996.
 - 45) 古賀2階級制覇ならず「銀」 7月24日
付毎日新聞夕刊, 1996.
 - 46) 競泳女子100メートルバタ鹿島4位, 青
山6位 7月24日付毎日新聞夕刊, 1996.
 - 47) 自転車男子1000十文字が「銅」 7月25
日付読売新聞, 1996.

- 48) 柔道男子中村兼は準決勝進出 7月25日付読売新聞, 1996.
- 49) 中村兼 悲願の「金」 初出場, 果敢に攻め 7月25日付読売新聞夕刊, 1996.
- 50) ソフト3勝目「決勝」へ前進 7月25日付読売新聞夕刊, 1996.
- 51) 十文字が「銅」 自転車千メートル 7月25日付朝日新聞, 1996.
- 52) 自転車1000メートル「銅」の十文字 7月25日付朝日新聞夕刊, 1996.
- 53) プロ「休業」し挑戦 世界の舞台快走 7月25日付朝日新聞夕刊, 1996.
- 54) 自転車1000十文字「銅」 7月25日付毎日新聞, 1996.
- 55) 女子ソフトボールは3勝目 7月25日付毎日新聞夕刊, 1996.
- 56) 中村行準決勝へ 7月26日付読売新聞, 1996.
- 57) 競泳女子800リレー200背泳ぎ中尾 4位で決勝進出 7月26日付読売新聞, 1996.
- 58) 男子サッカー2勝「決勝」進出逃す 7月26日付読売新聞夕刊, 1996.
- 59) 中村行「銀」 7月26日付読売新聞夕刊, 1996.
- 60) 中尾が決勝進出女子200背泳ぎ 7月26日付朝日新聞, 1996.
- 61) 「東京五輪」以来の決勝進出(平野雅人 男子1500メートル自由形予選) 7月26日付朝日新聞夕刊, 1996.
- 62) 中村行『銀』, 菅原は『銅』柔道 7月26日付朝日新聞夕刊, 1996.
- 63) サッカー決勝T届かず 7月26日付朝日新聞夕刊, 1996.
- 64) きょう「背水」のハンガリー戦 7月26日付毎日新聞, 1996.
- 65) 中村行準決勝へ 7月26日付毎日新聞, 1996.
- 66) 女子二百背泳ぎ中尾4位で決勝進出 7月26日付毎日新聞, 1996.
- 67) 中村行惜しくも銀 7月26日付毎日新聞夕刊, 1996.
- 68) サッカー2勝目8強はならず 7月26日付毎日新聞夕刊, 1996.
- 69) 柔道 田村野村準決勝へ 7月27日付読売新聞, 1996.
- 70) 競泳200バタ春名が決勝進出 7月27日付読売新聞, 1996.
- 71) 柔道前回上回る「金」3 7月27日付読売新聞夕刊, 1996.
- 72) 田村堂々, 準決勝へ 柔道 男子の野村も進出 7月27日付朝日新聞, 1996.
- 73) 田村再び無念の「銀」 7月27日付朝日新聞夕刊, 1996.
- 74) 84連勝の果て 20歳の涙 7月27日付朝日新聞夕刊, 1996.
- 75) 田村, 順当に4強 7月27日付毎日新聞, 1996.
- 76) 男子66キロ級の野村も 7月27日付毎日新聞, 1996.
- 77) 柔道田村, 決勝惜敗 7月27日付毎日新聞夕刊, 1996.
- 78) 陸上男子100メートル朝原, 準決勝へ 7月27日付毎日新聞夕刊, 1996.
- 79) 今夜 女子マラソン 7月28日付読売新聞, 1996.
- 80) 真木12位, 浅利17位 7月29日付読売新聞, 1996.
- 81) 女子マラソン真木12位, 浅利17位 7月29日付毎日新聞, 1996.
- 82) 金沢, 予選落ち 7月30日付読売新聞, 1996.
- 83) メダルへ順風満帆です 女子ヨット470級 7月30日付毎日新聞, 1996.
- 84) 金沢イボンス 予選で敗退 7月30日付毎日新聞, 1996.
- 85) 伊達は惜しくもベスト4逃す 7月30日付毎日新聞夕刊, 1996.
- 86) シンクロ3位発進テクニカルルーティン 7月31日付読売新聞, 1996.

- 87) 柔道・サッカー選手団が帰国 7月31日付読売新聞, 1996.
- 88) ヨット初メダル濃厚 女子470級の重・木下組 7月31日付読売新聞夕刊, 1996.
- 89) 日本, 3位でフリーへ シンクロ 7月31日付朝日新聞, 1996.
- 90) シンクロで日本3位発進 7月31日付毎日新聞, 1996.
- 91) 野球大勝 準決勝へ 7月31日付毎日新聞夕刊, 1996.
- 92) 女子バスケ, 米と対戦 8月1日付読売新聞, 1996.
- 93) 女子板飛び込み 元淵が6位に入賞 8月1日付読売新聞夕刊, 1996.
- 94) 元淵6位, 60年ぶり入賞 女子板飛び込み 8月1日付朝日新聞夕刊, 1996.
- 95) 伊東, 準決勝へ(陸上男子200) 8月1日付毎日新聞夕刊, 1996.
- 96) 女子板飛び込み 元淵6位入賞 8月1日付毎日新聞夕刊, 1996.
- 97) 重・木下組「銀」 ヨット日本初メダル470級 8月2日付読売新聞夕刊, 1996.
- 98) 野球, 決勝に進出 11-2強豪・米を破る 8月2日付読売新聞夕刊, 1996.
- 99) 和田ら好スタート レスリングフリー 8月2日付朝日新聞, 1996.
- 100) 日本ヨット初の「銀」 女子470級重・木下組 8月2日付朝日新聞夕刊, 1996.
- 101) 風吹かぬ・・・「メダル確保だ」 8月2日付朝日新聞夕刊, 1996.
- 102) でこぼこコンビを市民も応援 8月2日付朝日新聞夕刊, 1996.
- 103) 野球が決勝進出 11-2米下す 8月2日付朝日新聞夕刊, 1996.
- 104) ヨット初メダル銀 女子470級重・木下組 8月2日付毎日新聞夕刊, 1996.
- 105) 野球きょう決勝 日本VSキューバ 8月3日付読売新聞, 1996.
- 106) 男子1600リレー日本, 準決勝へ進出 8月3日付読売新聞, 1996.
- 107) 野球, キューバに敗れ「銀」 8月3日付読売新聞夕刊, 1996.
- 108) シンクロと太田(レスリング)銅 8月3日付読売新聞夕刊, 1996.
- 109) 女子1万 千葉5位, 川上7位 8月3日付読売新聞夕刊, 1996.
- 110) 9対13 壮絶打撃戦野球 8月3日付読売新聞夕刊, 1996.
- 111) 男子1600メートルリレー日本, 準決勝に進出 8月3日付朝日新聞, 1996.
- 112) 野球「銀」, シンクロは「銅」 レスリングの太田も「銅」 8月3日付朝日新聞夕刊, 1996.
- 113) 400メートルリレー予選で失格 8月3日付毎日新聞, 1996.
- 114) 野球きょうキューバと決勝 8月3日付毎日新聞, 1996.
- 115) 野球惜しくも銀 打撃戦キューバに及ばず 8月3日付毎日新聞夕刊, 1996.
- 116) シンクロ銅 4大会連続 8月3日付毎日新聞夕刊, 1996.
- 117) 太田も銅 レスリングフリー74キロ 8月3日付毎日新聞夕刊, 1996.
- 118) 今夜, 男子マラソン 8月4日付読売新聞, 1996.
- 119) 1600リレー強豪に挑む 8月4日付朝日新聞, 1996.
- 120) 男子マラソンきょう号砲 8月4日付毎日新聞, 1996.
- 121) 日本勢は谷口19位が最高 8月5日付読売新聞, 1996.
- 122) 1600メートルリレー日本新5位 8月5日付読売新聞, 1996.
- 123) 男子マラソン日本勢, 入賞ならず 8月5日付朝日新聞, 1996.
- 124) 日本勢は谷口の19位が最高 8月5日付毎日新聞, 1996.
- 125) 1996年(平成8年)7月記事索引, 朝日新聞縮刷版, pp46-52, 1996.
- 126) 1996年(平成8年)8月記事索引, 朝日

- 新聞縮刷版, pp45—47, 1996.
- 127) 1996年(平成8年)7月号記事索引, 毎日新聞縮刷版, pp27—29, 1996.
- 128) 1996年(平成8年)8月号記事索引, 毎日新聞縮刷版, pp27—28, 1996.
- 129) 平成8年7月記事索引, 読売新聞縮刷版, pp13—14, 1996.
- 130) 平成8年8月記事索引, 読売新聞縮刷版, pp14, 1996.
- 131) ナンシー関:「感動させてくれ病」と千葉すず, Number, 9:158, 1996.
- 132) 山崎浩子:「楽しさ」は自分自身の手で勝ち取る, 11月16日付毎日新聞夕刊, 1996.